山と博物館

第23巻 第12号　　1978年12月25日　　大町山岳博物館

黒沢尾根　　撮影　古幡和敬

山と私

ふるさと大町は山の町である。どこから見ても、いつ見ても山が美しい。針ノ木から、爺、鹿島槍、五竜と続く後立山連峯も、蓮華岳も総て私たちの山である。

私が学校の集団登山に初参加したのは小学校五年生の時である。三千メートルの山へ登る厳しさを知った私は、二度と山へは登るまいと思ったが翌年も又その翌年も同じ山に登った。その後教員となって任地に近い山をあちこち登っているうちに、少しは山が好きになったように思っていたが、山のよさが多少わかりかけてきたのは、足が弱って山登りの自信を失ってからである。

四季折々の山がきれいだなどと人並みのことを言っている間は山を知らない。それでも美しさに感動して、へたな絵を描き詩を作る。思うようにできないから技術的な問題として片づけてしまう場合が多い。山は遠くにあって自分に近づいてこない。同じように先輩から、「毎日の山の変化も読み取れないようなことで子供の指導ができるか」と叱られる。改めて山を仰ぐが人間のように感情をあらわにしない山の心を簡単には読みとれない。時間を問わずいつまで見ていても倦きない山であっても、こちらの話しかけに対し答えてはくれない。それに較べ正直に何んでも話しかけてくれる子供たちと一緒にいると、学校の仕事はむずかしいことではないような錯覚におちいることもある。

大町では、東と西の山が全く対照的である。西のアルプスに対し、低くて、まろやかで、誰からも注目されないのが東の山である。しかし此の山あっての大町であり日本アルプスがある。おだんごのような母なる東山三山に抱かれ人々は育てられてきた。山岳博物館はそんな東山の中ほどにある。大町の貴重な財産というより県宝として市民はこの博物館を護り発展させてきた。山を愛し美しい自然を求める若者の力によってさらにこの博物館がいいものに発展することを望んで止まない。

（山博協議委員　海川清）

ニホンカモシカの海外渡航

小森　厚

ニホンカモシカは、日本特産の動物として特別天然記念物に指定されていますが、動物分類学上も、また貴重な存在であって、ヨーロッパやアメリカの哺乳動物の研究者は、早くからこれに目をつけ、手に入れたがっていたものです。ニホンカモシカが、いつごろから欧米に知られるようになったかは、よくわかりませんが、学術的には、シーボルトが、オランダのライデンにある国立自然博物館に送った標本によって、同館々長のテミンクによって、一八三七年（天保八年）、カプリコルニス、クリスプスなる学名をつけられ、この頃、続々と発刊されていたシーボルトの「日本動物誌」でヨーロッパの人々に紹介されたのが最初といえましょう。このときの標本は、シーボルトが江戸参府の帰路、一八二六年（文政九年）に大阪、高津にあった黒焼屋の店先で見つけたものと思われます。もちろん、これは死んだ標本でした。

北京動物園のニホンカモシカ
大町山岳博物館からおくられたもの

ニホンカモシカが生きた姿でヨーロッパに紹介されたのは、明治になってからのことです。明治時代には、日本の動物園でも、ニホンカモシカが飼育された例は、きわめて少ないのです。上野動物園の前身といえる山下町博物館の動物飼育場（これは後に鹿鳴館の敷地となった場所にありました。）に、明治九年、栃木県産のカモシカが飼われていた記録はありますが、その前後のくわしいことは不明です。明治十五年三月に上野動物園が開かれたときには、その飼養動物のなかにカモシカは含まれていなかったようで、その後、明治二十四年九月五日に、神奈川県でとれたカモシカ一頭が寄付された記録があります。

さて、生きたニホンカモシカがヨーロッパに紹介されたのは、一八七九年（明治十二年）、ロンドン動物園に到着した若いおす一頭が最初の記録のようです。これは、まだ上野動物園が開かれる前のことで、前述した明治九年のカモシカと関連があるかどうかについては不明で、ロンドン動物園に到着した若いおすは、当時、横浜に在住していたヘンリー・プライヤー氏の寄贈になるものです。このプライヤー氏は、一八五〇年ロンドンに生れ、一八七二年（明治五年）保険会社の社員として横浜に来て、一八八八年（明治二十一年）三十九才で没するまで日本に住み、昆虫や鳥類をしらべ「日本蝶類図譜」を出版したほか、函館にすんで、津軽海峡のブラキストン線で知られるトーマス・ブレーキストン氏（一八三二年―一八九一年）と共著で「日本産鳥類目録」をあらわしています。プライヤー氏はまた、一八七六年（明治九年）の七月から十月まで三ケ月の契約で、山下町の博物館と東京開成校（東大の前身）の動植物標本採集者となっていますので、もしかしたら、前述の栃木県産のカモシカをロンドンに送ったのかもしれません。

その後、生きたニホンカモシカが、どのくらい海外に送り出されたのか、調査不足でよくわかりませんが、大正十年九月には、当時の上野動物園主任（事実上の園長）黒川義太郎氏は、次のように記しています。

『羚羊（かもしか）は日本特産なので、諸外国から度々懇望されましたが、猟人等は生けどるのが困難なため、鉄砲で打殺しますので、残念ながらその要求に応じる事がいつも出来ません。』

なお、ついでながら、この同じくだりに、黒川氏は、友人の中村熊太郎という人が、これを飼って、優良な毛を採集しようと試みたけれど、捕獲が困難なのであきらめたと、のべています。大正時代にすでに、ニホンカモシカの家畜化を考えた人がいたというのは、驚きです。

昭和八年に、サーカスをつれて日本各地を巡回したドイツのロレンツ・ハーゲンベック氏も、ニホンカモシカをほしがったけれど手に入れることができなかった話もあります。また、戦後、占領軍の力をかりて、アメリカの学者が、ニホンカモシカの標本を採集してアメリカに送った話は、御存知の方もいるでしょう。この時も、生きたカモシカを手に入れようとしたのですが、失敗に帰したという話も伝えられています。

戦争によって荒れ果てていた上野動物園は戦後、海外の動物園との交流によって、復興の実をあげてきました。その中でも、やはりニホンカモシカは、しばしば交流の対象として、アメリカやヨーロッパの動物園から要望されました。とくに、昭和二十八年前後にアメリカ、カリホルニア州のサンディエゴ動物園との交流を行ったときも、強い願望がのべられてきたのですが、上野動物園からは、園で繁殖したタンチョウを送り、ニホンカモシカについては、将来、機会があればと、努力を約したのにとどまりました。

昭和二十四年頃から、上野動物園はニホンカモシカを飼う努力をはじめていますが、これは、日本特産の動物の飼育繁殖技術を開発し、それを動物園で展示しようという計画にもとづいていたのですが、一つには、海外の動物園の、これに対する要望にこたえて、戦後の日本の動物園復興に力をかしてくれた厚意にむくいたいとの願いもこめられていたのです。

戦後のニホンカモシカの飼育繁殖への努力については、本誌でもふれたことがありますので省略しますが、大町山岳博物館が、その努力へ大きな役割を果し、岳子が、長寿記録を樹立して天寿を全うしたことも、すでに御承知のことでしょう。そして、こうした飼育繁殖への努力の果実として、ニホンカモシカの海外渡航に口火を切ったのも、他ならぬ、大町山岳博物館だったのです。

昭和四十七年、中国との国交回復を記念しておくられてきたジャイアントパンダのおかえしとして、翌四十八年四月、上野動物園を経由して、大町山岳博物館から、おす、めす二頭のニホンカモシカが、北京動物園に送られました。おすの太郎は同博物館生れですが、めすには、当初同館生れの町子が予定されながら、出発直前の事故で負傷し、急拠、その年の三月、辰野市で保護され、博物館に収容されていた辰子が送りだされたのです。太郎、辰子は、北京で、毎年子をうみながら、まだ

生れた子が完全成育するまでには至っていません。しかし、海外での初繁殖に成功するのは間違いないことでしょう。あれから五年有半、日中平和条約の批准書交換のために来日した鄧小平副首相の歓迎ぶりをテレビで見ながら、当日、太郎、辰子を送り出すまでの様々な経過を思い浮べました。

二番目の海外渡航は、アメリカ行きでした。昭和五十一年十月、三重県御在所岳にある、日本カモシカセンターで生れたアイ、マコのおす、めす二頭のニホンカモシカが、名古屋市とロスアンゼルス市との姉妹都市交歓で、ロスアンゼルス動物園に送られました。この二頭が、アメリカ大陸に、はじめて、あしを踏みしめたニホンカモシカで、ロスアンゼルスでは、さっそく学者のプロジェクトチームで、その飼育繁殖の研究に取り組むといった力の入れようです。この二頭のカモシカのお返しとして送られてきたおす、めす二頭のロッキーマウンテンゴートは、現在、日本カモシカセンターで飼育されています。

このロスアンゼルスへのニホンカモシカ初渡航を見て、すぐ隣の都市にあるサンディエゴ動物園は、いきり立ちました。前にも述べたように、二十年以上も前から要望を重ねてきたのに、すぐ近くの動物園に先をこされてしまったからなのです。そこで、さっそく、共同研究にあたっていた日本の学者をとおして日本政府に働きかけ、日本動物園水族館協会などにも要請して、昭和五十二年十一月に、長年の念願をかなえることができました。富山県立山町にある富山県風土記が丘かもしか園で生れたコタロ、チコのおす、めす二頭が日本カモシカセンターを経由して、サンディエゴに送られたのです。残念なことに、めすのチコは、アメリカに着いてから下痢がつづいて、ついに死亡し、おすのコタロも、元気がなく、まだ検疫舎に隔離されたままであると聞いています。

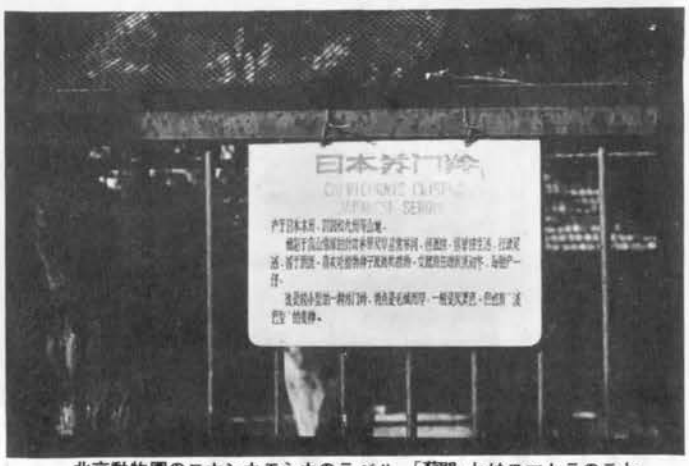
これより先、中国の古都である西安市と、日本の古都、奈良市とが姉妹都市となり、これを記念して、動物交流が行なわれることとなりました。このため奈良市は、市内のあやめ池遊園に保護収容されていたコロ、ユカのおす、めす二頭のニホンカモシカを、昭和五十二年十月、市長をはじめとする使節団といっしょに西安に送り出したのです。この二頭は、奈良県吉野郡十津川村で保護され、あやめ池遊園で子をうんでいたものですが、「海外に送るなら飼育下で繁殖したものを」と念願していた、ニホンカモシカの飼育者で組織しているカモシカ会議での要望を押し切った形での海外渡航でした。中国では、国をあげて動物園の技術向上に力を入れていますので、きっと繁殖にも成功するものと思っていますが、今のところ、西安からは、その後の消息について便りがありません。

さて、昭和五十三年になって、今度は、三重県知事が訪中した際に、北京で、三重県で誇るべきものともいえる日本カモシカセンターから、ニホンカモシカをお贈りすると約束を交してきました。あいにくセンターには、送り出すだけの余分のカモシカがいないのでさきにのべた富山県風土記が丘で生まれたおす、めす二頭が、三重県産のものに代って、北京動物園に行くこととなり、この稿を書いている現在、出国検疫を受けていますので、これが活字になるころには、北京では二度目のニホンカモシカを受けとって、さきに大町から行った二頭との間で、新しく繁殖計画が練られていることでしょう。

また、ロスアンゼルス動物園では、繁殖を重ねた場合の遺伝的な問題を考慮して、姉妹都市の名古屋市東山動植物園に、さらに、おす、めす二頭を送ってもらえないかと、問い合わせてきました。幸いなことに、昭和五十二年以降、東山動植物園でも、ニホンカモシカの飼育にとりくみ、繁殖にも成功していますので、昭和五十四年には、何とか、その要望に応えようと、計画を進めています。

このように、中国とアメリカに次々と、ニホンカモシカが海外渡航しては、ヨーロッパの動物園もだまってはいないでしょう。すでに、ドイツの西ベルリン動物園や、チェコスロバキアのプラーハ動物園は、そこで繁殖に成功したシャモアとかモウコノウマなどの稀少動物との交流で、ニホンカモシカを受け入れたいと名乗りをあげています。現在、日本国内では、八十頭余のニホンカモシカが、十八か所ほどの動物園、博物館、保護センターなどで飼育され、そのうち半分をこす四十頭余が、飼育下で繁殖したものなのです。ヨーロッパへ、ニホンカモシカの渡航が実現するのも、そう遠い先のことではないでしょう。そうすれば、ちょうど一世紀ぶりのニホンカモシカの渡欧ということになるでしょう。

ところで、この文のはじめの方に、ちょっぴり名前の出たプラキストン線の北、すなわち北海道には野生のニホンカモシカはすんでいませんが、その北海道としてははじめて、昭和五十年十月に、札幌市円山動物園に、富山県風土記が丘から、三頭のニホンカモシカが送られました。残念ながら、このうち二頭のおすが肺炎で死亡し、めす一頭が残されました。カモシカは寒さに強いという先入観から防寒対策に気を使わなかったための失敗ですが、円山動物園では、今度こそはと万全の準備を重ねた上で、この五十三年十月、おす一頭が、再び富山県から送り出され、プラキストン線の津軽海峡をこえました。外国の話ではありませんが、これもニホンカモシカにとっては、重要な海外渡航の記録の一つということができるでしょう。ドサンコのニホンカモシカの誕生が待たれるところです。



北京動物園のニホンカモシカのラベル。「鈴門」とはスマトラのことすなわち「ニホンスマトラカモシカ」という意味の名となっている

〔参考文献〕
一、上野益三（一九七三）、日本博物学史、平凡社・東京。
二、黒川義太郎（一九三四）、動物談叢、改造社・東京。
三、佐々木時雄（一九七五）、動物園の歴史西田書店・東京。
四、佐々木時雄・他（一九七七・遺）、続動物園の歴史、西田書店・東京。
五、千葉彬司（一九七七）、岳子と歩んだ二一年、山と博物館・二二一五。
六、小森厚（一九七三）、ニホンカモシカの全国飼育状況（一）（二）、山と博物館・一八一六・八。
七、日本動物園水族館協会（各年度）、カモシカ会議経過報告。

（多摩動物公園）

台湾の紹介

八幡泰平

戦前・戦中派の方は御存知の名前かも知れませんが、新高山というのは現在では「玉山」と呼ばれている、現地では「フウサン」と呼ばれ、我々日本人は「ギョクサン」と呼んでいる。

今年の六月の始め、私は仲間と共に、新高山、つまり「玉山」と「新次山（雪山）に登ることが出来た。日本に近い国であっても、国外へ出るのですから、一応の手続きを取る必要もあるし、予防注射もするのですから大町市から後立山の針ノ木岳へ登るのとは少し勝手がちがうのは当然かも知れません。

玉山に登る場合、日本の登山と異ることは台湾の山岳協会に入山の申し入れをし、許可を得ることが要求されるし、現地では案内人が一人つくことも知らなくてはなりません。そして案内人の許可がないと登山できないことや、費用も我々が払う事も知っておく必要がある。

近頃は日本人の間で台湾へ旅行するといえば、少々周囲の人々の目を意識するような風潮になっていて我々山へ登る者にとって迷惑なことであるが、台湾の空港で多くの日本人が団体でさわいでいるのを見て、単なる噂ではなく事実なのかなあとも思った。

我々が台湾の山へ登る一番の利点は日本から近いこと、又ある程度日本の言葉が通用することが上げられる。事実費用は国内旅行より少し多い程度です。むしろ言葉の問題も四十五才以上の人々は日本人と同じように話すので不自由はない。

台湾は多くの人々がすでに知っているように支那海の陸棚上に位置する大きな陸島で、面積は三五五七〇㎢、北緯二十一度四十五分～二十五度三十八分にある南北に長い島である台湾の脊梁にある台湾山系は、島の東辺に接近して縦走し、玉山をはじめ三〇〇〇メートル以上の高峰が五十余も存在するといわれている。

台湾山系の東側は急斜して深さ六〇〇〇メートルにおよぶ大平洋海底に急落している。西側は緩斜面が続き、平地となり西岸に達する。地層はすべて脊梁山派の軸と平行しているので、その配列は東から西へゆくにしたがって若くなっている。最古の地層は始新統のもので、台湾山脈に見られる粘板岩がこれにあたる。

第四紀における台湾の地盤運には沈降と隆起が認められ、現在見られる隆起珊瑚礁や礫層をいただく傾斜地塊もその結果である。また台湾の地質が非常に若いこともつけ加える必要があるWissmann（1937）によると「台湾が現在のように高い山を持つ島として生起したのは（南京の黄土についての研究から）最後の氷期であるウルム氷期にあたり、この時まで中国大陸と陸地をもって連なっていた」と推定している、我々が見た範囲では山の形や谷のようすは日本と同じ様であったが、新しい土地だという感じは余りしなかった。

気候は山岳地を除けば年平均二十度を下らず、雨量は全島を通じてきわめて多いと云われている。我々の訪れたのは丁度梅雨期の終る時であったので、雨に降られたり、晴天となったりで良い体験ができたといえる。山岳では日本の高山の七月の頃と同じであり、無人小屋の場合は相当しっかりした装備をする必要がありそうだ。

台湾は植物の種類の多いことで有名である。又、分類学上注目すべきものが多いとされている。地形が南北に長いことから緯度による植物相の変化があり、高山における垂直分布もいちじるしい変化がある。西岸の海の近くでは木やいのシダ類があり、日本と著しく異った様相を生している。竹林はいたるところにあり、中部から北部にかけてケイチク、シチクの発達が著しかった。玉山への道水里からにすると、大変長時間歩くことになるが、植物の垂直分布をみるためには大変有意義なコースになる。

低地におけるマンゴー、リュウガン、ビンロウジ、マチク、チイタチなどを見られるし高度が高まるにしたがって温帯的、寒帯的植物相に変化する。

海抜九〇〇メートル～一八〇〇メートル付近は常緑広葉樹が優勢であり、その主な樹種はクスノキ科とカシ類が多い。落葉樹にはケヤキもあるし、ニイタカアカマツの、針葉樹も見ることが出来る。一八〇〇メートル～三二〇〇メートルの高度になると、落葉樹および針葉樹が次第に優勢となり、三三〇〇メートルを超えるとほとんど針葉樹となり、日本の亜高山帯の植物相と似てくる。おもな針葉樹は、ベニヒ、タイワンヒノキ、ニイタカアカマツ、タイワンビャクシン、ニイタカカトウヒ、タイワンツガ、ニイタカトドマツである。山頂近くなると、タイワンビャクシンが日本の高山のハイマツの様に生育し、シャクナゲ類が多くなり更に高所になると高山草原となっている。

我々は出発前から、平地に住む人々と、山岳地方に住む人々は異った言葉で話すことは知っていたが、山岳地方の人々と平地の人々が共通して使っていた言葉が日本語だったという事は知らなかった。このことは、私にとって驚きであった。現在では教育が徹底して北京語が日本語に替ったとのことである。がそれにしても四十才代の人は話せるし、山岳地方の人々の中では若い人も日本語を聞くことはできるという話を聞き、うれしくなった。

全日程をお付合してくれた「王」さんは、五十才代ではあるが、日本語、ブヌン語（高砂族の中のブヌン族の言葉）、中国語、台湾語が話せるので頭が下がったし、体力も我々の三倍～四倍の荷物を背負い、人格もすばらしく立派で感服してしまった。王さんのような人は、今の日本には少ないのではないかと教えられて来た。又王さんが小学生の時に教えていただいた先生が日本の娘さんで、若い日本人の先生達によって、山岳地方の人々（高砂族）の生活が改善された事等々、感謝の気持ちで話された時には、何か日本人でよかったなー と思わずにはいられなかった。

外地では余り評判の良くない日本人だが、良い事をして感謝された日本人も居たことをお知らせして台湾の一部の紹介を終りたい。

（白馬村北小学校教諭）

博物館だより

岳子のはく製できる

去る10月1年6カ月ぶりに博物館に岳子が戻ってきました。

山と博物館第23巻第12号
一九七八年十二月二十五日発行
発行所　長野県大町市TEL②〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額八〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野一三、二九三）